

T. S. Eliot と Shakespeare の *Sonnets* の問題

岡 田 岑 雄

T. S. ELIOT AND THE PROBLEMS OF SHAKESPEARE'S *SONNETS*

Mineo OKADA*

SUMMARY

In his famous essay on *Hamlet*, T. S. Eliot referred to Shakespeare's *Sonnets* as 'full of some stuff that the writer could not drag to light, contemplate, or manipulate into art.' In his ranking of the *Sonnets* with *Hamlet* ('*Hamlet*, like the *Sonnets*'), he seems to have a critical view on the artistic perfection of the *Sonnets*, though, probably, not so critical as to label them as 'artistic failure.' What does this rather obscure comment on the *Sonnets* imply? His comment involves his attitude about the problem of personal expression in poetry, and is related to his early poetic, and his later dramatic, method.

The implications of his comment on the *Sonnets* can be seen on several levels. First, the level of the poetic style in which Shakespeare was gradually reaching for the complex expression of his mature plays but had not yet completely mastered it. Second, the circumstances in which the *Sonnets* were written, circulated among 'his private friends' and published. That that they are not necessarily in 'the right order' and do not make a 'sequence', that they are different in style and quality, suggests an attachment of the author with the material, a lack of artistic ordering and perfection in which the poet's personal emotion and poetry should be separated. Third, the peculiar quality of the Elizabethan sonnet sequence as an artistic medium, in which 'the man who suffers' and 'the mind which creates' are not completely separated, in which the convention is not perfected as in Dante's *Vita Nuova*. This point relates to the themes treated in the *Sonnets*, and also in the Problem Plays, in which the themes are displayed as problems unsolved rather than given artistic resolution. Eliot was deeply concerned with these themes, but he sought for their expression in his own self-conscious way, beginning with the use of *personae* in his early poetry, and later expressing them through the characters of his dramatic works. His comment on the *Sonnets* may be considered as a by-product of his quest for the proper medium to express these themes.

* 英語教室 (Dept. of English).

T. S. Eliot がその批評家としての活動の初期の時代、1919年頃に主張した、詩人についての「非個性」(‘impersonality’), 詩についての「情趣からの逃避」(‘an escape from emotion’) といった考え方は、実は Eliot 自身の強烈な自意識、自らの強烈な「個性」「情趣」を意識した上で、これらのものと取り組む姿勢を示したマニフェストであったということは、一般に認められてよいことであろう。彼のこの早い時期の作品論、「ハムレット」論もそうした姿勢を示した評論「伝統と個人の才能」(*Tradition and the Individual Talent*) と内容的にも時期的にも密接に関連があり、その中にある彼の「個性と情趣を持っているものだけがそれから逃れようと思うことがどんなことであるかを知っている」という言葉に見られる彼の主張の逆説性がこの「ハムレット」論でも露呈していて、これは「主人公 Hamlet でなくて作品 *Hamlet* が問題の中心である」と最初に規定しておきながら、情趣の表現のあり方をめぐって主人公 Hamlet の描き方へと論旨が展開し、結局はその背後にある Shakespeare の個人的体験への言及で終わっている点にも見られるであろう¹⁾。Eliot が Shakespeare を「個人的苦悩を普遍的かつ非個人的なものに変えようと苦闘した」詩人として考え (*Shakespeare and the Stoicism of Seneca*), また個人的体験とその詩的表現、「経験する人間」と「創造する精神」を厳密に区別する姿勢を示している (*Tradition and the Individual Talent*) 一方で、彼の殆んど唯一の独立した Shakespeare の作品論の結末において、このような Shakespeare の ‘personal experience’ への関心が示されているということは、彼の「個性」「(個人的) 体験」「情趣」といったものに対する態度が、その評論における決然とした言い方にも拘らず、いやむしろ逆にそうであるが故に、確固とした固定したものではなく、彼のそうした態度の表明が彼の精神にもたらしたものが complacent な確信ではなくて、問題への極めて緊張に富んだ態度であったことを暗示しているように思われる。

こうした点、Shakespeare の体験、情趣とその表現のあり方、をめぐって問題になるのは *Hamlet* 論の中の次の一節である。

Hamlet, like the sonnets, is full of some stuff that the writer could not drag to light, contemplate, or manipulate into art. And when we search for this feeling, we find it, as in the sonnets, very difficult to localize.

Eliot のこの *Sonnets* への言及は不明確である。というのは、*Hamlet* と *Sonnets* の両者に共通性 (少くとも類似性) を認めているながら、一方は劇であり、他方は詩集, sonnet sequence という 1590 年代特有の使命、役割を課されていた特異な表現形態であるというジャンルの違いから来る問題点については何も言及していないからである。しかし他のいくつかの状況証拠から、この問題について Eliot が如何に考えていたであろうかを推測することはできるであろう。この一節が出て来るのは、有名な ‘objective correlative’

1) この点についてはこの紀要 18 輯の拙稿「シェイクスピア批評におけるエリオットの一面について」(1971年12月)でふれた。

という術語が使われる直前の箇所においてであるが、この中の 'some stuff...' がどういうことであるかという論旨が、次の objective correlative の欠如の指摘、Hamlet の情趣と Gertrude の性格との不適合という問題から更に Hamlet の「狂気」の特異性とそれを描いた当時の Shakespeare の「個人的体験」へと発展し、'We must simply admit that here Shakespeare tackled a problem which proved too much for him.' という概括にまで展開されていると理解するならば、Shakespeare が *Hamlet* との関連において *Sonnets* についても如何なる見方をしていたかが、問題となって来よう。即ち Eliot がここで問題にしている点で、*Sonnets* は如何に *Hamlet* に似て (like) いるのか、Shakespeare が *Sonnets* において 'drag to light, contemplate, manipulate' することができなかったこととは、「彼の力に余った問題」とは何か、ということであり、この問題についてのほんの緒でも捉えたいというのが、今の目標である。

L. C. Knights はその *Sonnets* 論の中で、伝記的解釈、Shakespeare の個人的体験に直接結びつける解釈に反対する立場から、Eliot の上の一節について、次のように述べている。

The sentence might be taken by the biographers to refer to an especially painful personal experience lying behind the *Sonnets*. But it suggests more profitable speculation if we interpret it *in the first place* as meaning that Shakespeare had not yet fully mastered the technique of complex expression.²⁾

確かに引用した一節で即座に Eliot が *Sonnets* の背後にある Shakespeare の「個人的体験」を意味していると考えるのは問題であろう。(但し、*Hamlet* についてのこの発言が次第に展開して前にふれたような結末に至ったとすれば、*Sonnets* についてその可能性を全く否定することは出来ないであろう。)しかし Eliot のこの *Sonnets* への言及は Knights のいうごとく '(complex) expression' の technique の面にだけ限定してしまうことは、この問題の様々な implications を余りに単純化してしまうことになるのではないか。というのは問題が Knights のいうごとく technique の面から発してもそれだけにとどまらず、もっと深い背景を持ち、より大きな context に発展して行く可能性を否定し得ないもののように考えられるからである。

Knights が *Sonnets* について言っている 'technique of complex expression', Shakespeare の円熟期の複雑な表現の技法が充分でない、ということは、Eliot が *Hamlet* についても指摘しているところである。冒頭の亡霊の場面における Horatio の台詞³⁾ は *Romeo and Juliet* の時代のものであり、それに対して V. ii の *Hamlet* の台詞は全く彼の成熟期のものである、という versification の不統一が *Hamlet* を 'artistic failure'

2) L. C. Knights: *Explorations*, Chatto and Windus, 1951. p. 58

3) But, look, the morn, in russet mantle clad,
Walks o'er the dew of yon high eastern hill. (I. i.)

と断定する先ず最初の根拠として挙げられている⁴⁾。

style, versification の面で, *Sonnets* は多様であり, 一般的に言って番号の早いものは初期の劇作品と対応する点があり, 後に進むにつれて悲劇期の作品の tone に近づいて行くことは多くの論者の指摘するところである。1590 年代の文学の流れの中で *Sonnets* のこうした性格を初めの方の詩篇は初期ルネサンスの均一で単純な感受性を, 後の方の詩篇は Donne などに共通した複雑性・多面性を示しているとして, 多くのパラレルの例を示して例証したのが P. Cruttwell であった⁵⁾。ここでは Eliot にならうつもりもないが, *Romeo and Juliet* 的文体の一つとして, 思いついた例を一つだけ挙げておこう。

Full many a glorious morning have I seen
Flatter the mountain tops with sovereign eye,
Kissing with golden face the meadows green;
Anon permit the basest clouds to ride.... (Son. 33)

Many a morning hath he there been seen
With tears augmenting the fresh morning's dew,
Adding to clouds more clouds with his deep sighs.
(*Romeo*, I, i. 131-3)

こうした style, versification の多様性, 不統一は, *Sonnets* 全体の構成のあり方と共にそれが書かれた状況と関係して来るといえるであろう。Eliot に特に *Sonnets* を取り上げて論じた文章の存在を知らないが, 1927 年に J. M. Robertson の *The Problems of Shakespeare Sonnets* という本の書評を *The Nation and the Athenaeum* 誌 2 月 12 日号に載せており (この Robertson は *Hamlet* 論の中でも彼の説を Eliot は自分の論拠にしており, Eliot とは性の合った批評家らしいが), その中で Eliot が Robertson の考えに賛同しながら *Sonnets* について次のように述べている。

It is sure to impress anyone who, like myself, has never been sure either that the Sonnets were all in the right order, or that the whole one hundred and twenty-six were really a sequence at all, or that they were all by the same hand. Admit one of these doubts, and you admit the others; the only solid alternative to Mr. Robertson's theory is to maintain that the Sonnets are all Shakespeare's, that they were written consecutively, and that they all

4) ついでながら上の Horatio の台詞は後年 1951 の講演 *Poetry and Drama* では偉大な劇詩, 'music of dramatic poetry' のすぐれた実例としてあげられているのは, 時間というものが Eliot の見方に与えた変化の一例としても興味深い。

5) Patrick Cruttwell: *Shakespearean Moment*, 1954. Chap. 1.

refer to the same experience or nexus of experience.... and there are good reasons, which you will find exposed in Mr. Robertson's book, for believing that they were written at intervals over a long period of time.⁶⁾

こうした考えが *Knights* などの *Sonnets* 論と共通し、その基本的前提となっているのは一読して明らかであろう。

問題はここで Eliot が Robertson に賛意を表しながら指摘する *Sonnets* の 'sequence' としてのまとまりのなさ——style の点でも、出来ばえ、完成度においても⁷⁾ (これは当然のことながら扱われている問題 (theme) の性質に関係して来るが)——であって、これは *Sonnets* が書かれた状況、更にそれが如何に読まれたかという事情——Francis Meres の有名な 'his sugar'd sonnets among his private friends' (1598) という言葉に見られる状況とあわせて考える必要がある。つまり問題は *Sonnets* がかなり長い期間にわたって書かれて、文体の様々な相違を含んでいるという以上に、それがまとまった詩集として当然必要とされる、作者による意識的編成の努力を経ないで、流れ出した形で人々の手にわたり、出版されたという事情にあるだろう。つまりこうした作品の発表のされ方は Eliot が警戒する作者と作品、作中人物との近すぎる関係を示唆する訳である。Eliot がこうした関係を *Hamlet* について指摘したのは、以前論じた通りであるが⁸⁾ それは人物 *Hamlet* の描き方を通じてであった。*Sonnets* についても、*Hamlet* とは違った視点からこうした関係を指摘することが可能であろう。

Eliot が「伝統と個人の才能」の中で主張した、詩人の生の感情と作品の分離、'the man who suffers' と 'the mind which creates' の分離の考え方は、彼の Robertson の書評にもはっきり見られるのであって、

Poets and trained critics of exceptional sensibility, may be the best judges of *value*, but not of *authorship*. The greater the verse, the less it seems to belong to the individual who wrote it.⁹⁾

問題はこのことを Eliot が *Sonnets* 全体について認めていないということにあるようだ。

ここで触れざるを得ないのは、*Sonnets* における、更にエリザベス朝 sonnet sequence における、詩人の自己表現の問題、及び sonnet という表現媒体 (medium) の性格である。これと関連して、*Sonnets* についてそれが本当の伝記的「事実」を伝えるものか、単なる

6) *The Nation and the Athenæum*, 1927. pp. 665~666.

7) Robertson の結論は、Eliot のまとめているところによると、ちゃんとまとまっているのは最初の 17 編だけで、他のは全部が Shakespeare の手によるものかどうか疑わしいとして、'...of those by Shakespeare, some are perfunctory, some intimate, some early, some late; but they allude to several experiences and moods.' と結ばれている。

8) 前掲, 拙稿. pp. 33~4.

9) *Nation and the Athenæum* 1927. p. 666.

convention にすぎないか、という議論はすっかり out-of-date になってしまっていて今更取り上げるつもりもないが、こうした議論が起る背景に近代の人間の「個性」への絶大なる信頼、個人の体験の独自性をそのまま文学的価値をみなす考え方があり、Eliot が Dante の『新生』(*Vita Nuova*) についての論評で、ある意味で *Sonnets* の論議と共通した context の中で、そうした背景に触れているのを指摘しておくのも無駄ではないであろう¹⁰⁾。それは『新生』についての論議を 'biographical' と 'allegorical' の両派に分け、後者に幾分肩入れしながら、『新生』は 'a mixture of biography and allegory' であるがその 'mixture' は近代の精神 ('the modern mind') では得られない配分 (recipe) によるものだ、と述べている¹¹⁾ 後においてである。ここで 'allegory' の代りに 'convention' をおきかえれば *Sonnets* についてあてはまる極めて妥当な意見といえるかも知れない。更に Eliot は『新生』における「経験」の性質についてふれた後で、『新生』の理解について、当時のイタリア詩人や更にプロヴァンスの抒情詩人達の作品の理解の必要性についてふれて次のように述べていることも、*Sonnets* の 'convention' の問題の理解に参考になるであろう。

Literary parallels are important, but we must be on our guard not to take them in a purely literary and literal way. Dante wrote more or less, at first, like other poets, not simply because he had read their works, but because his modes of feeling and thought were much like theirs.¹²⁾

この 'likeness' が広義の convention の内容を形成している訳で、*Sonnets* の場合にもその convention の背後に互いに似た 'modes of feeling and thought' があつたといえるのであり、それは単なる 'literary exercise' である、というような断定のためにあるのではなくて、その時代の精神的風土といったものと関連しているといえるであろう。そして Shakespeare の場合には、sonnet というこの時代に特有な、しかも当時の多くの詩人達が試みた、表現形式を与えられていたということが、convention と彼の独自性、言葉の広い loose な意味における「伝統」と「個性」のあり方を極めて微妙なものにしていたといえるであろう。いいかえればエリザベス朝の sonnet sequence という形式と、"the biography has unquestionably been manipulated almost out of recognition to fit into conventional forms of allegory"¹³⁾ ということが可能であった、Dante の場合の 'allegory' という形式との比較の問題であろう。

この両者について本格的に論ずることは到底できないが、エリザ朝ソネット連作集という形式が詩人とその作品との関係において持っていた、一種の曖昧さ、融通無下の幅の広

10) Eliot: *Dante* 1965. Faber Ed. pp. 56~57.

11) *ibid.* pp. 55~56.

12) *ibid.* p. 60.

13) *ibid.* pp. 55~56.

さ、といったものがここで指摘できよう。つまり詩篇の中でいう ‘I’ が作者自身であることと全く別の fiction の産物であることとの、この間の範囲を比較的自由に移動できた、ということである。場合によってはその ‘I’ が作者の persona の役割を果たすことも可能であった。Shakespeare の場合についていえば、他の多くの詩人達の ‘I’ の persona の一人称の背後にかくれて、自分の体験を表現することができた、といえようか。このあり方は、Eliot の後の批評用語を用いれば、場合によっては、第一の声は、必然的に話しかける相手を予想した第二の声のみならず、客観化された第三の声にもなり得るということで、Shakespeare はこの特有の性質を十分に自分のものとして、自らの体験をこの時代の普遍的な体験として、表現できた、といえるかも知れない。

しかし *Hamlet* 論を書いた当時の、‘the man who suffers’ と ‘the mind which creates’ との分離を意識して求めていた Eliot にとっては、*Sonnets* におけるこうした詩人のあり方は、極めて問題のあるものとして考えられたと想像される。この当時、初期の詩において Eliot が自らの感情を表現したのは、Prufrock, Gerontion, Tiresias といった人物の声を通じてであって、これらの ‘personae’ とソネット連作集における「詩人」とは本質的に違っていたことは明らかであろう。つまり前者は Eliot によっていわば新しく作り出されたものであり、そのはっきりした役割を背負されていたのに対して、後者においてはそのようなはっきりした分離の意識があったか、Shakespeare については疑わしいし、彼はいわば与えられていた形式をそのまま使うということが、そのまま自己を表現することに結びついていたといえるからかも知れない。これは Eliot 自身にとっては芸術作品として好ましくない事態であろう。

そしてそこにはエリザ朝ソネット集として表現されるべき内容と Shakespeare 自身の問題とのかかわり合いもあり、問題は作者と表現形式の問題、作者の作品における自己表現にとどまらず、そこに扱われる問題 (theme) にまで関連して来る訳である。この意味で Eliot にとっては、Shakespeare が sonnet sequence という形式を用いて、そこで扱われている問題を扱おうとしたことは、*Hamlet* とは違ったあり方において彼の手に残った問題 (‘a problem which proved too much for hm’) に思われたであろうし、それがまた Robertson と共に *Sonnets* の ‘sequence’ としての一体性を否定する根拠になっているとも考えられる。

Sonnets とその convention の関係は Dante の『新生』の場合のように「殆んど見分けのつかない位に伝記がアレゴリーの conventional な型の中に適合される」といったすっきりしたものではないであろう。そしてこのことは『新生』と *Sonnets* の内容についての Eliot の見方と当然関連して来るように思われる。Eliot の『新生』についての見方を端的に示す言葉が *Shakespeare and the Stoicism of Seneca* (1927) の中にある——‘his (Dante’s) brave attempts to fabricate something permanent and holy out of his personal animal feelings—as in the *Vita Nuova*’. これは彼が Shakespeare にも見られる特質としてあげているものの一つであるが、これを Eliot は果たして1919年の時点において *Sonnets* について認めたであろうか。少なくとも *Sonnets* に描かれている世

界が 'permanent' で 'holy' であるとは、読んだことのある人ならば、信じられないであろう。この意味でも両者の比較は確かに 'interesting occupation' (cf. *Dante*, p. 46) であろう。*Dante* の場合において、詩的体験の理想的構成が行われているのは、その体験の人間的生臭さを取り去って、感情、体験の昇華 (sublimation) が実現されているからだとして Eliot が考えているのは明らかであろう。そこには人間の体験の完結性といったものを感じ取っているとも言えるであろう。しかし Shakespeare の *Sonnets* については、そうしたものとむしろ逆のものを我々は感じ取らざるを得ないであろう。そこに表わされているものは、Renaissance の愛の体験における分裂の痛切な表現であろう。勿論そこに Shakespeare の 'struggle...to transmute his personal and private agonies into something rich and strange, something universal and impersonal' という面は存在しているように、そこに見られる 'something rich and strange' は *Dante* の場合とは違ったものとして Eliot に感じられているのは確かであろう。*Sonnets* における様々の themes, そこには確かに 'sequence' としての統一性を見出すことは難かしいか知れない。時間と美との対立、理想主義的な愛の理想と暗黒な愛欲の深淵、それらがそのままに、結末・完結性を与えられずに、その対立、矛盾が正視されて表現されているといえよう。それと同時に読者にはまたそこに描かれている「体験」が sonnet の convention との関連でどの程度まで客観化されているか、そこに「経験する個人」と「創造する精神」の分離がどの程度まで行われているか、についてもはっきりした断定は下せないであろう。

以上見て来たことによって、Eliot の *Sonnets* に対する見方は詩人の体験の表現のあり方、作者の作品の分離のあり方に対する彼の見解 (特に 1920 前後の初期の時代の) に関連していることが明らかになって来たように思われる。最も表面的にはっきりした形で指摘できるのは、その表現のあり方、詩的 technique の段階における 'sequence' としての不統一、ということであろうが、それは必然的にそういった不統一をもたらした状況と、更に 'sonnet sequence' という表現媒体における「作者」と「作品」との関係、更にそこで表現されるべき内容・主題 (theme) へと問題が発展して来た訳である。Eliot が *Hamlet* と併べて *Sonnets* について「作者があかみひっぱり出し、観照し、あるいは技巧をこらすことができなかつた材料」を指摘しそれが結局「Shakespeare が彼の手に残る問題に取組んだ」という評言にまで関連していると考えられるのだが、こうした彼の見方が出て来たのは、当時の sonnet sequence の conventional な表現形式として特質、その不安定さと、それから来る作品の中での詩人の声を作者自身のそのままの声との区別ができないという性格、「経験する人間」と「創造する精神」の分離の不徹底を Eliot が感じとっていたからであろうし、この後の方の性質は Eliot にとっては *Hamlet* と共通する問題であったことは確かであろう。

勿論 *Sonnets* に扱われてい内容・主題 (theme) が Eliot にとって無縁のものであったことはないのであって、*Sonnets* における人間の愛、あるいは愛欲の問題は様々に姿を変えて後の詩や劇において方々で扱われているといえよう。ただ少なくとも 1920 年前後の Eliot にとっては、そうした問題を表現するには *Sonnets* におけるようなやり方とは別

のやり方があるはずだ、ということになってそれが初期の詩における数々の「ペルソナ」(personae) の声を通じての表現、*The Waste Land* の“The Fire Sermon”や *Sweeney Poems* における劇的、具象的表現となって実現されているといえるかも知れない。勿論 Eliot は詩においては年が経つに従ってこうした表現方法から脱して、自らの声で語るようになって来るのはよく指摘されていることである。それと同時にそこに人間的なドラマの要素を脱して、冥想的な性格のものになっていくのも確かであろう。これは Dante 論における “...the love of man and woman... is only explained and made reasonable by the higher love, or else it is simply the coupling of animals.” (*Dante*, p. 60) という認識と連なっているかも知れない。その一方では、初期の詩に出ていた「人物」達は、彼の劇においては完全な登場人物 (character) となって、生きた人間により近い現実性を与えられるようになって来る。Eliot が初期の批評において問題にした作者の思想、感情と作品との関係は、劇詩という表現媒体を与えられることによって、整然としたものになる可能が出て来ると同時に、Eliot 自身の場合においては更に微妙なものになって来ていることも否定できないように思われる。Shakespeare が *Sonnets* や喜劇、問題劇で扱った愛の理想と現実の問題 (theme) は Eliot の *The Cocktail Party* においても扱われていると考えられるのであるが、凡庸な現実との妥協を排して、「死」に至る理想の道を択ぶ Celia の生き方に Eliot が最も自分の信念を託しているのだ、といった見方程素朴で「生きがい」を説くのに好都合なものはない。かといって Reilly の人間相互の理解の可能性の否定の上に立った、現実的生の受容といった考えを Eliot 自身が説いているとも勿論いえない訳である。初期の喜劇 (例えば「真夏の夜の夢」) において、人間の「愛」の結びつきというものが如何に他愛のない、偶然に支配されたものであるかを描いた Shakespeare にとっては、Reilly の科白などはもっともらしい御説教としてしか感ぜられなかったかも知れない。

Shakespeare においては、愛の理想と現実のテーマを表現する場合にも、Eliot のように初期の詩から *The Cocktail Party*, *The Elder Statesman* に至る表現形式、方法の意識的な探求、作品における ‘impersonality’ といった近代人的自意識がそれ程強く働いていたとは必ずしも言えないであろう。Eliot のいうように Shakespeare には「自らの苦悩を何か豊かな不思議なものに変えよう」とする苦闘 (struggle) があったことは確かであろうが、それが *Sonnets* や問題劇の時代——Eliot のいう「危機の時代」(‘a period of crisis’——Eliot: *Hamlet* 論)——の作品において、解決されざる問題を問題のままに提示し、また理想と現実の分裂をありのままに示すことによって、その時代の問題を、‘emotional intensity of his time’ を表現するのを妨げるものでなかったことも確かのように思われるのである。こうした意味において、*Sonnets* が Eliot がいうような点において *Hamlet* と、更に *Troilus and Cressida*, *Measure for Measure* といった作品と関連があり、その点において少くとも初期の時期において Eliot に不評であったとしても、それが我々読者にとっても不幸であったかどうかは簡単に断定はできないように思われる。